

階級の諦念と哀感、次世代への期待の入混じった心の内を淡々と語る重厚な人物を見事に演じきった。十九世紀イタリアのみならず、旧制度からの転換期に立たされた人間の葛藤の優れた表現だった。

続く「家族の肖像」でも退廃的な人々の蠢く群像で存在感を放つ。この映画に登場したのがヘルムート・バーガー。彼は先の「地獄に落ちた勇者ども」でナチス政權下のドイツ財閥一族の墮落した息子として女装して、デートリツヒ「嘆きの天使」の主題歌を唄ってみせ、又後には狂王ルードヴィッヒ役と、共に複雑な内面を抱く人物を十二分に演じた。

鑑賞者が配役の適否について思い巡らすのは、その映画に演劇的要素が強いからで、タルコフスキー映画では無い事だ。悪や愚かさ、孤独を描きながら、人間を救おうとした点において通底する、何れも好きな映画である。

奥村知世 高校の試験では一位を争っていた。彼は理数系が得意

で、私は文系科目を含めまんべんなく点数を取るタイプだった。彼はテニス部で真つ黒に日焼けし、太い右腕を持っていた。私は文芸部で三つ編みを二本垂らし、星新一を真似てショートショートを熱心に書いていた。彼はガールフレンドとよく廊下で話していた、私は好きな数学教師に褒められたいがために念入りに勉強していた。

文芸部の顧問は図書館司書で、休み時間や放課後、私は大体図書館にいた。そのころ出会った電撃文庫の「ブギーポップ」シリーズに私は夢中になっており、図書館で借りては読んでいた。

いわゆるライトノベルはまだ図書館では肩身の狭い存在だったが、高校の司書さんは理解のある人で、田舎の小さい高校の割にはそれなりのラインナップがそろっていた。

彼がしょっちゅうライトノベルの棚の前において、とりわけブギーポップシリーズが好きなことを気づいたのがいつだったのかは覚え

ていない。時折感想を言い交したり、新作が入ったことを教え合ったりした。

お互いに首都圏の大学に進学し、たまに連絡を取り合ってコーヒーを飲む付き合いを続け、就職を機に年賀状のやり取り程度になった。彼は素敵な奥さんと結婚し、お子さんが生まれたようだ。私はライトノベルを読まなくなっていた。

突然、彼から「新人賞を取り、出版します。献本します」と連絡が来た。ライトノベルの新人賞で、送られてきた本は目が大きく髪が豊かな女の子と、きりつとした目の黒髪の男性が描かれたイラストの表紙だった。カタカナの世界で、キラキラした人物たちが冒険をしていた。

その後、年に一冊程度のペースで新作が送られてきた。研究者としての仕事をしつつ執筆活動をしているとのことだった。今年送られてきた本は電撃文庫から発売されていた。サイン入りのその本は本棚の特等席に置いてある。『ブギーポップは笑わない』の文庫版

を隣に置こうかと思っている。

田中拓也 最近、心に残った一冊は谷津矢車「廉太郎ノオト」(中央公論社)です。「花」荒城の月「箱根八里」などの唱歌の作曲家として知られる瀧廉太郎の二十三年間のドラマチックな生涯を描いた青春小説です。

この小説の読みどころは沢山あります。現役最年少の十六歳で東京音楽学校本科生となった廉太郎の活躍とそのあまりに早すぎる死は言うまでもありませんが、その周辺の群像や時代描写が抜群です。

例えば、廉太郎のライバルであり友人のバイオリニストの幸田幸(幸田露伴の妹)。東京音楽学校の後輩であり親友の鈴木毅一。そして、東京音楽学校の学生たち。明治時代の青春群像が見事に描かれています。当時の学校生活の様子や進路選択、そして友情や恋愛、結婚観。作者が歴史小説を数多く発表しているということもあります。が、そうした細かな描写が大変魅力的です。(ちなみに、「心の花」